

# 基本設計方針



疏水側二条橋から京都会館をのぞむ

日本を代表する建築家である前川國男によって昭和35年に造られた京都会館は、京都・岡崎地域に建ち、京都の建築・都市の伝統を生かしつつ、20世紀近代建築の理念を実践した戦後のモダニズム建築の傑作である。この建築は日本建築学会賞等、数々の賞の受賞が示すように、専門的に高い評価を与えられただけではなく、広く市民にも愛されて今日に至った。その建物価値を後世に引き継いでいくことが大切なことなのは、専門家のみならず京都市民の多くが認めているところである。

一方で、築後50数年を経たこの建物は、各所で老朽化が進行しているだけでなく、会館としての機能が、今日求められるものと大きく隔たったものとなっていることは、誰の目に見てもあきらかなものとなった。機能を重視する近代建築は今回の検討委員会の議論でも繰り返し論ぜられたように、「使われてこそ価値がある」のであって、これまで市民に愛されてきた建物を、これからも長く愛されるものとして保つためには、必要にして適切な手入れを継続していかなければならない。

モダニズム建築は、求められる機能を充足することによって生み出されるものであるが、時代によって求められるその機能が変わった時に、機能向上を図りつつ、その建物価値を継承する再整備には、伝統的な様式建築の改修とは異なる、新しく、かつ困難な問題がある。これまでの数多くの歴史的建築物が示しているように、保存再生されつつ生き続けることは建築芸術の本質であり、また優れた保存再生とは、単に老朽化した部分を補修することではなく、時代毎の新しい価値を、古い価値の上に重ねていくことではなくてはならない。伝統を保存し収蔵するだけではなく、生かして育てていくことこそ、歴史都市京都の公共建築において求められているのである。今回のケースは、この困難な問題に正面から挑む日本で最初のチャレンジになると考える。

香山壽夫建築研究所所長 香山壽夫

## □ 基本設計方針

### 1. 既存の建物価値を継承しつつ、近代建築の保存再生を実現する

- ・近代建築として評価の高い京都会館を可能な限り生かしつつ、舞台等の機能を改善し、市民をはじめとした様々な人々に、継続して利用され続ける公共施設として再整備を行う。
- ・「京都会館の建物価値継承に係る検討委員会」により2011年10月から2012年3月迄、計5回の議論を経て取りまとめられた「京都会館の建物価値継承に係る検討委員会提言」を受け、設計に反映させる。
- ・増築部分においてはこの建物の価値をふまえ、時代の変化・景観の変化のなかであるべき建物の姿を俯瞰的にとらえ、その魅力をさらに高めるものとする。
- ・既存改修部分においては、京都会館の価値をしっかりと捉えた上で、経年による劣化や汚損、積み重なる部分的な改修などを補修復原し、外壁や大庇、中庭床など主要な構成要素を建設時の姿に回復させる。機能上あらたに付加される部分についても、既存部分がもつ質感と調和する素材や色調を選択する。



現況 二条通外観



現況 外観詳細



現況 第1ホール内観  
音楽ホールとして設計されたホールを、演劇にも対応した多目的ホールとして運用していくため、設備の老朽化のみならず、機能上の問題を多数抱えていた

### 2. 歴史ある「文化の殿堂」として、現代における「総合文化活動の拠点」として多様な利用ニーズに応えられるよう機能向上を図る

- ・現代的なニーズに応え、質の高い文化芸術の創造や鑑賞が可能となるよう、舞台機能の向上を図る。
- ・限られた敷地のなかで現代的な市民の多様なニーズに応えうる最低限必要な水準をもとめ、舞台機能の向上と、会館としての機能性と快適性を確保する。
- ・第1ホールにおいては、舞台レベルを下げるなど疏水側からのボリュームのに配慮しつつ、主舞台有効高さ27mと奥行10間（18.1m）を確保する。建物の規模をおさえるため、楽屋は客席下部と地下階におさめる。また、現代の劇場において不可欠な機能である「開演前の観客のため空間」として新たに共通口ビーを中庭に面してもうける。

#### 現況 第1ホールの主な問題点と再整備計画の内容

##### 主な問題点

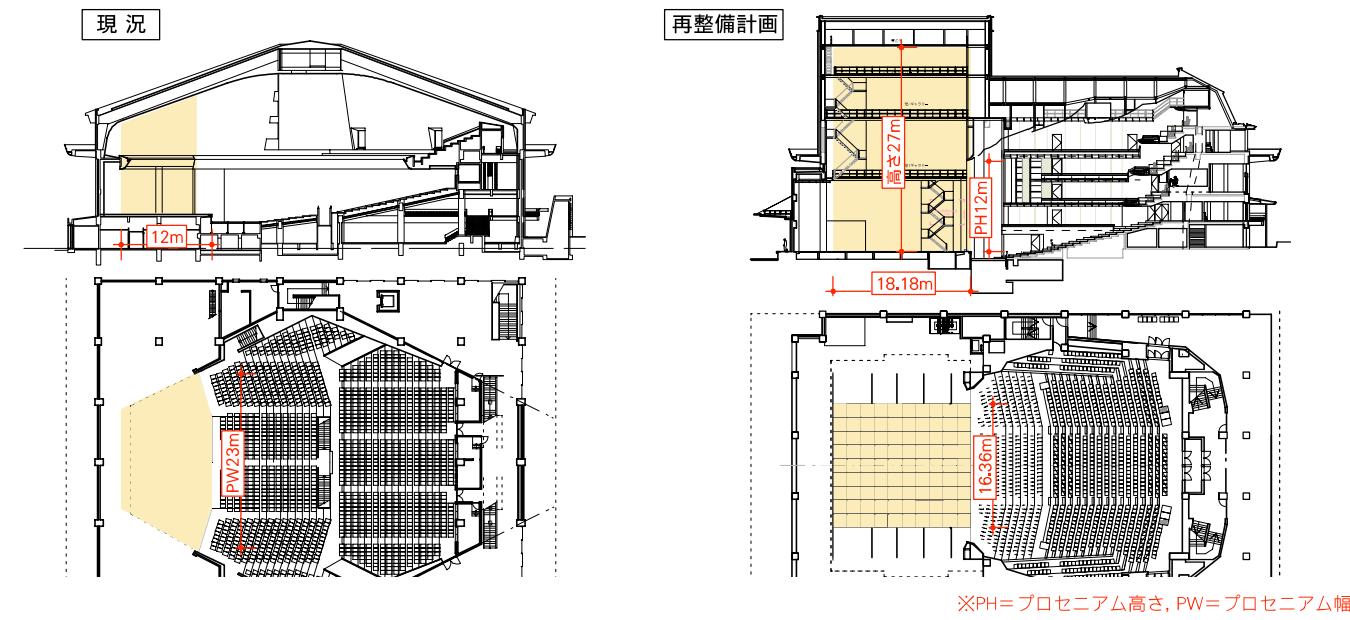
- ・舞台奥行きが不足しており、演技をするスペースが小さく、充分な舞台セットが組めない場合がある。
- ・舞台が奥に行くほど、狭くなっている、舞台間口と同じ幅の背景が設置できない。
- ・舞台内高さが不足しており、舞台上部も奥に行くほど低くなっているため、舞台セットを上部に上げられないなど、舞台上部を有効に使えない。
- ・バトン等の吊り物数が少なく、積載荷重にも制約があるほか、吊り物を設置できる上部スペースも不十分であるため、舞台転換に時間がかかるなどの、演出に制約が生じている。

##### 再整備により改善される内容

- 舞台間口9間(16.36m)×奥行き10間(18.18m)。舞台上有効高さ27mを確保し、様々なジャンルの舞台芸術に対応する。
- 吊物機構においては、分速90mまでの無段階可変速型、最大積載量1トンのバトンを設置。レベル設定、レベル表示、同期運転への対応、静音性能に優れたワインチ等の最新の機能により、多用な演出を可能にする。

現況第1ホール 主な施設・仕様				舞台サイズ (プロセニアム時)				再整備計画第1ホール 主な施設・仕様				舞台サイズ (プロセニアム時)				
客席数	1F	2F	計	間口前部23M (間口後部13.2M)	奥行12M	高さ前部 平均6M～9.5M (可変)	計	客席数	1階席	2階席	3階席	4階席	計	間口16.36M (9間)	奥行18.18M (10間)	プロセニアム高さ(PH) 12M
通常席	1562	443	2005					通常席	1102	260	343	286	1991			
車椅子席	10		10					車椅子席	8	2			10			
計	1572	443	2015					計	1110	262	343	286	2001			

高さ後部13.2M  
吊物バトン本数：7本 全て手引き



※PH=プロセニアム高さ、PW=プロセニアム幅

### 3. 岡崎地域の活性化や魅力の保全・創出を牽引する機能導入や環境整備を進める

- ・様々なイベントを通して国内外に京都・岡崎発の芸術文化発信をめざすとともに、「情報交流の場としてのMICE機能向上」や「環境に配慮したまちづくり」といった岡崎地域全体での取組テーマに即した施設とする。
- ・当該地区の優れた都市景観の継承や、東山を借景とする豊かな環境との調和を図りつつ、これまで以上に地域に親しまれ、日常的に使われる施設としての再生、新しい活力創造に寄与する。
- ・二条通に面する会議棟1階は、これまで管理事務機能がおさめられ、閉鎖的な表情となっていたのに対し、物販あるいは飲食の機能を備えた「にぎわいスペース」として整備する。こうしたパブリックスペースの充実と外構の整備とが相まって、地区全体の人の流れを変え、景観に豊かな活気と楽しさを加えるものとなる。



現況 東山を借景とする中庭



現況 会議棟二条通側1階の様子

## □ 今後の事業スケジュール(予定)

平成24年 11月 実施設計着手 (10箇月)

平成27年 8月 竣工 (工期24箇月) ※ 平成27年度内の開館を目指し、再整備を進める。



